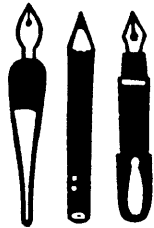


あたりまえからの出発を

●「情熱」と「管理」の間で

日教組の当面の闘う相手は自らの存在そのものとなり、まさしく「教師のあり方」が問われてきている



池田知隆

■いま、問われる教師のあり方

「やっぱり、教師のあり方をめぐる分科会も必要だね」

今年一月下旬のある夜、東京・新宿の飲み屋で会った日教組のある執行委員はこう切り出した。岩手県盛岡市で一月十日から四日間開かれた日教組、日高教の教育研究全国集会についての感想を語り合ったときのことだ。

全国から約一万人もの教師たちが教育実践をひっさげて集まってくるこの教研は、今年

足元を洞察する眼がない

で三十二回目。国語、社会、数学などの各教科や、「生活指導と学校行事・クラブ活動」

「選抜制度と進路指導」「平和と民族の教育」「民主的な学校づくりとPTAの民主化、地域住民との連携」など問題別に二十六分科会に分かれて討議し、会場は五十四カ所にもほぼマンモスぶり。だが、なぜか、教師論の分科会はない。同時に、教師自らを問う直すような論議もほとんど聞かれぬ

に、失望させられる。

教師は、子どもたちのことを語ることはできても、自分たちのことを語るのは苦手なのだろうか。もっぱら「教えること」専門で、自ら「学びあう」姿勢はあるのか、なんて思ったりするが、その執行委員は、あっさりと言ったのけた。

「ええ、そうですよ。教師のあり方そのものがいま一番問われていますね」

彼が、教師論分科会の必要性を言い出したのも、そんな自戒の意味を込めてのことだ。

教師論分科会を設けても「教師は労働者か、聖職者か」をめぐって、社会党、共産党勢力を中心になぎやかな、空中戦、が繰り広げられるだけかもしれない。それでも、なお、教師のあり方をきちんと論議する場が必要だといふ。国鉄職員のみならず、がここ数年、ヤリ玉にあげられてきたが、次の標的は日教組、という危機意識もある。

彼は、やや自嘲気味に、酒をおおるよう飲みながら続けた。「社会や父母の糾弾を浴びても仕方のないようなハズレ教師はいる。日教組の内部からみてもそういえる。それだけに、いま、自分たちの教師論をたたくわけ、足元を見つめなければいけない。だけど、いざ、教師論の分科会を開いても、参加者がさっぱりだったたりして……」

私自身、教研の取材を重ねるたびに、そう

■高知「教研」から岩手「教研」まで

教研を初めて取材したのは三年前の高知教研。ちょうど校内暴力が全国に広がった時期で、「生活指導」分科会では、ある中学校で

思う。教育に寄せる教師たちのあふれんばかりの情熱は確かに感じられる。しかし、その情熱の行方になんとした異和感を抱くことも少くない。

教研が開かれるのは、いつも一月の厳冬期。小、中学校の広々とした体育館に石油ストーブを数個並べただけの、冷え込みの厳しい分科会場。そこで朝九時から午後五時まで連日熱心にメモをとる教師たちのマジメさ。そんな教師の姿や様々の教育実践報告に圧倒される半面、その論議にある虚しさを覚える。

どんなに一生懸命に教育に励んでも、足元を見つめない限り、その一生懸命は、教師の自己満足になりかねない。現在の教育内容、教師の生活、日常性がどうなのか、その基本的な土台を洞察する眼がないことには、救いがない。そこが、すっぱりと抜け落ちているような気にかられる。

「教師論」は素通りのまま

生徒会が「非行を許すな」と立ち上がり、校内の非行を克服した例が報告された。発表した教師は「この喜びを参加者の皆さんと共に

分かち合いたい」と感激で声をふるわせていた。が、その生徒会の活動ぶりをみて、私はすっかり驚いてしまった。体育館の床に全校生徒が座り、生徒会役員たちが物差しを持って一斉に生徒の髪の毛を点検しながら走り回っていたからだ。教育熱心な先生ほど、その情熱のあまり、いつしか軍隊的なしつけ、訓練を強制してはいないか。非行防止とは、子どもたちを飼いならすことなのだろうか。その教育への情熱のはけ口を見誤っていると思えた。

翌年の東京教研では、近畿のある中学校が「非行防止対策として、教師集団の意志統一と団結で克服した」と実践例を報告、教師の集団主義が注目を浴びた。その実践内容は、学校のある地域から非行をなくすため、教職員が一致団結して、学校行事として地域懇談会を年二回、新入生の父母に対するオリエンテーション、日曜日の西郷学校、小学校区ごとの教育懇談会を毎月一回などを精力的に開催、父母とのつながりを強化した、というのである。学内でも「授業が終っても、自習や質問の時間をあて、生徒を騒がせたり、遊ば

せたりしないようにした」そうだ。

その自信に満ちた報告者の朗々とした発表。だが、その後、実際はどうなのか。九州のある教師が質問した。

「日曜日ごとの両親学級に、教師がでいくのは実際のところ大変だったろう。しかし、そこに出席するのは、いわゆる。良識派の父母たちで、問題を抱えた子の親たちは出席したのだろうか。一般に、非行生徒の親は、その種の会合では、他の親に頭を下げ、針のムシロに座らされる気持ちにさせられる。結局、問題生徒が、親に迷惑をかける」と家出をし、結果的に地域ぐるみの監視という形で、非行生徒を地域から追いたて、排除してはいないか」と。

すると、当の報告者は、その質問に怒り、「そういうあなたは何をやっているのか」と叫ぶ始末。そこで議論は立ち消え、司会者は各地から教育実践を持ち寄ったレポーターに

●リッチになった「温室育ち」

いったい教師はいま、どんな存在なのだろうか。教研に集まってくる教師たちの服装も

まんべんなく発言させ、いわゆる報告集会になった。しかし、教師たちが「子どもをこう変えた」という報告を一日中聞いているのもうんざりする。

昨年の広島教研で、話題になったのは京都の小学校のレポート。小学校でもたばこ、万引などが広がり、非行の低年齢化が進んでいるというショッキングな実態の報告だった。ところが、後で、地元が「実態からかけ離れている」と抗議する騒ぎにまで発展。報告者も、父母の抗議を認め、謝罪するというところで結着した。つまりは、誇大発表だった、ということである。

そして今年の岩手教研。教師たちが、非行生徒たちの内面に入って取り組んでいる地道な実践報告がわずかに増えてきたものの、それでも体罰や管理教育をめぐる論議はほとんどなかった。「生活指導する教師像」の問題は忘れ去られたままだった。

子ども・親の生活が見えない

年々良くなってきた。「豪華なマントを着て、各会場を回る若い先生もいましたよ。時

いで約八年間、社会人生活を過ごしたあと、教職の生活に飛び込んだその教師は、続いても言った。「先生の生活は、まさに温室ですよ」と。

「温室育ち」ということを言い換えると、「世間知らず」ともいえる。こんなレポートがある。非行防止のため学校と家庭が生活指導をめぐってどう協力すべきか、をテーマにある中学校が作成した「子育てパンフ」に書かれた文章である。

「両親が、暇さえあれば、子どもの前でゴロ寝するような家庭は非行の温床です」別の中学校の父母の呼びかけ文にもこう書かれてある。

「非行防止のため、父親は週三回、子どもと夕食しなければいけません」
「どうしてこんな文章が書けるのだろうか。親と子とのふれあいはもちろん大切だ。しかし、父親の生活ぶりがわかれば、教師がそんなことを要求するのは無理とわかるはずである。子どもと親の生活が見えていないし、そこから親身の指導もできるはずはない。教師なら仕事が終わると、さっさと家に帰ること

代は変わりましたね。その一方で、分科会の発表はとても素直で、あまり議論にならなくなりましたね」とある分科会の助言者は、苦笑まじりに語っていた。

教師たちは確かにリッチになった。かつて、いい人物が教師にならないのは、待遇が悪からだ、という意見があったが、いまは通用しない。いわゆる「教員人材確保法」で、教師は他の公務員よりも給与がぐーんとあがった。しかし、待遇の向上が質の向上には直結したとはいえず、リッチになった分だけ、逆に「見えない世界」が広がってはいないだろうか。

いま、手元に一冊の資料がある。三重県教組がまとめた「組合員の生活と職場要求および社会活動の意識に関する調査」という分厚い報告書。一九八〇年二月、組合員の約半数を対象に実施したもので、人権法実施（一九七四年）前の調査データとも比較分析されている。

それによると、教師の所得の伸びは六年間で約二倍。年収四百一十五万円が一九・七％で一番多く、次いで三百一十四万円が一八・もできる。だけど、厳しい企業競争の中で働くサラリーマンに「子どものため」といって帰ることが許されるだろうか。くたびれ果てて、家でゴロ寝せざるをえないことも知ってほしい。

若い二、三十代の教師自身、すでにテストに追いまくられた世代である。中学校ではテストの成績によって振り分けられ、友達も同じくらいの成績の子同士に限られていく。高校も進学校。つばりの子がどんな生活をしていて何を考えているのかわからずに育ち、教師になって初めて幅広い生徒たちに直面するようになる。「教師のたまご」の学生時代は、自治会活動は避けないと、教員採用試験に不利になるといわれ、政治的、社会的問題については「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿型の生き方を迫られる。さらには、自分の時間はなるべく確保したい、という「個室派」傾向も強く、リーダーシップはあまりない。

「教師の生活は温室」というその定時制高校教諭はこうもいった。
「教職員の間で相互批判も少ない。その気

になれば、自分の殻に閉じ込められて、その日暮らしを続けることだって簡単ですよ。事実、そんな先生が多い。教師はサラリーマン

■集団主義・「熱中」の落とし穴

いわゆる学校内の非行問題は、教師集団の統一ができれば、八割がたは解決する、という指摘が分科会であった。それほど、教師自身、職場の人間関係づくりが不得手なのかもしれない。しかし、集団主義ですべて解決できるものではない。

もう二年前になるが、教師の「情熱」を考へるとき、東大阪市で起きたあの大阪中学校での集団欠勤騒ぎを思い出す。五十六年二月、先生が集団欠勤で二日間休校になった。まさに大阪弁でいう「けったいな」事件だった。いまさら蒸し返すのは、現在の学校関係者には迷惑かもしれないが、教師の甘え、閉鎖性などいろんな意味で教師の病理を浮き彫りにしている。あえて、取り上げてみる。

その発端は、二人の若い女教諭の指導のあり方をめぐる教諭間の対立。それが、二教諭の長期病欠となったことで、他の教師集団と

化したというけど、サラリーマンの世界はもっと厳しい。だから、その日暮らしの先生はサラリーマン以下ともいえますよ」

管理主義の流れに不感症

校長・教頭との対立までエスカレートし、教諭の大半が一斉に「登校拒否」したのだ。ちょうど高校入試など中学三年生にとっては最も大切な時期にもかかわらず、生徒はほったらかし。さらに集団欠勤の理由が「校長や管理職は、教育熱心な私たちのことを考えてくれないから」というのだから、奇妙な感じだ。どうして「教育熱心さ」と「集団欠勤」が結びつくのか、さっぱり理解できなかった。

父母ももちろん「先生たちは身勝手すぎる」と猛反発。市教委と教諭集団との話し合いの際、学校正常化の条件の一つになったのは、二教諭の長期病欠の真相を市教委がはっきりさせ、生徒に説明することだった。そんなことで教育現場が混乱したのか、と首をかしげるばかりだった。「自分たちはこれだけ情熱を傾けて取り組んでいるのに、ズル休みしている同僚のカバーまでさせられてはたま

イク事故をなくす」という安易な現実論に寄りかかってはいないだろうか。

ある新聞の投書にこうあった。高校生から寄せられたものである。

「本人（生徒）の自覚なしに一方的に押しつけることがどんなに危険で無駄なことか、戦争を体験した大人なら絶対にわかってはいるはずなのに……」

表面的に見れば、オートバイがなければ、事故はなくなる。暴走族にも入りようがない。しかし、現実には、オートバイに同乗して暴走行為したり、無免許運転してかえって事故を起こす者が後を絶たない。さらに問題なのは、高校生に対し、「問答無用」と一斉に「上から規制」したことである。

青森県では、学校に無届けで免許を取った生徒が集団で丸坊主にされたケースがあり、和歌山県立箕島高校では、生徒約六百人が学校側の「免許証強制預かり制」に反発して校庭に座り込み、授業をボイコットする騒ぎがあった。生徒たちは不満を爆発させている。「バイクに乗れる有職の」定時制高校生だったら、事故で死んでもいいというのか。

らない」という教師たちの不満がどっと噴き出しただけのことである。

小阪中は生徒指導が厳しく「非行のほとんどない学校」といわれ、教師自身も「熱意に満ちた教育に取り組んでいる」との自負心が強かった。しかし、教育への情熱が過熱したあまり、教師自身の姿を見失わせ、暴走したのである。教育における「熱中」の意味を深く考えさせられる事件だった。

その教師の集団主義を考へるうえで、少し気がかりな問題がある。高校生のバイク規則のことだ。これは、教師というより教育行政全体をより問題にすべきかもしれないが、少し触れておきたい。

高校生にバイクを「運転させない」「免許を取らせない」「買ひ与えない」といういわゆる「三ない運動」。数年前から急速に全国に広がり、ほぼ定着した感があるが、このバイク規則が抱えている教育的意味は大きい。バイクや権利を取り上げることが、いったい教育だろうか、という疑問は依然として残っている。日ごろから「個性豊かな教育」「生徒との対話」を掲げている教師たちが、「バ

規制の意味が理解できない。自分の学校、自分の学級の子さえ問題を起さなければいい、という教師の無責任さ以外のなものもない」

「先生はマイカー通勤してきて、スピード違反などをやっている。どうして先生はよくて、生徒はいけないのか」

オートバイは一つの道具であり、通行の手段。非行の道具にもなるが、大切なのは使い方。一律規制は、ちょうど食中毒を起こすからといって、食物を与えないようなものだ。人命尊重の立場から個々に乗らないように呼

■地域の教育力を破壊したものは

今年の岩手教研でも、論議の一つの焦点になったのは、地域の教育力をいかに高めるか、というテーマだ。つまりは、教師と父母、子どもの関係をどう豊かにするか、ということだ。

宿直制の廃止で、担任教師の当直の夜、子供たちがしめし合せて宿直室に集まり、教師としゃべることなくなった。教師たちはマイカーで、自宅から学校まで直行し、学校

びかけることと、規制で強制的に「乗るな」と禁止することには格段の差がある。理想論と一笑されるかもしれないが、教育の基本は生徒との対話であり、話し合いを通じて解決することにある。一律規制は管理強化の流れにしかなく、そこでは教師と生徒はどこまでも平行線をたどり、反発、不信と摘発のいたちごっこが続くばかり。教師たちは「管理主義」にいつしか不感症になったかのようだ。あらためて言うまでもなく、ファシズムも軍国主義も「善意の」「熱心な」顔でやっているのである。

マイカー通勤の功罪にも気付かず

近くの住民とあいさつをかわす機会がなくなった。子どもの遊び場を駐車場として占拠し、車の煙を子どもたちに撒き散らし学校を後にする教師。いつしか、教師と父母、子どもとの距離は広がってきている。

「教室はいわば密室で、教師はタクシー運転手と同じ。密室志向の若者が教師になりましたが、授業が終わるや職員室に駆け込み、マイカ

「で帰る教師とふれあおうにも、そのとっかかりがない、という父母の嘆きもよく聞かされる。「生活指導」分科会で三重の中学教師がこう発言していた。

「非行が多発するのは、地域の教育力が崩壊しているからだ。かつて、子どもたちは、身近で働いた父親の後姿を見ながら育ったものだ。地域の文化を高めていかなければならぬ」

教師が言わんとしていることはわかる。だが、学校そのものが地域の教育力を破壊していることもある。石川県のある中学校の女教師は、次のような例をあげて指摘した。

「お祭りのみこしの飾りを子供が泊り込みで作ったりするとき、酒やたばこを覚える心

■「住民との連携」分科会の声

教師への不信や不満を次々とあげ、その拡大再生産を図るのは不毛な気もする。でも、あえて続けて書く。「PTAの民主化、地域住民との連携」の分科会で、次のような発言を耳にした。

いか」と。

一方、父母の不満も根強くある。

「先生がたは国定忠治だ。署名のときだけは山(学校)をおりて、あとは出てこない」

「PTAの会合にはいつも校長と担当教諭だけ」

「町内会にも顔を出さない」

父母と教師の連携、そのあたりまえの関係

■「生き生きとした学校」への改革に向けて

今年の岩手教研では、平和教育を高々と掲げた昨年の広島教研に比べて論議の内容が地味だった。校内暴力については、以前の「起きてはならない大変な事態が生じてしまった」という受け止め方から、「起こるべくして起きた」と冷静な対応策を話し合う空気になってきた。教師が自らを問い直そうという兆しが見えた。といったらささか、取材の目が甘すぎるかもしれない。ただ、単に、教師たちが自信を失い、無力感にとらわれているだけにすぎない、ともいえそうだ。

「徳は教えようがない」と古代ローマの哲人はいった。道徳論をいくら説いても一人の

配があると、他校生との交流をやめさせる中学校が多い。すると、地域の子だけでは人数すぎてお祭りに参加できなくなり、結果的に学校が地域に根ざす文化を壊している」

教師が「地域の教育力が失われた」と嘆く前に、地域における学校、教師の日常の姿にどれだけ目を注いでいるのだろうか。マイカー通勤一つとっても、その功罪にどれだけの教師が気付いているのだろうか。もちろん、マイカー通勤をやめ、宿直制を復活しろ、と言っているでもないし、仮りにそうしても昔の状態に戻らせることは不可能。今、失われつつある基本的なもの、子どもたちや父母とのふれあいをどうやって新しく創り出すかが、求められている。

「先生がたは国定忠治だ」

◆「職場の民主化を図り、運動会の日曜日開催に反対した」(長崎の報告者)

運動会は体育の授業の一環。また「共働き」教師は子供を保育園に預けられず、日曜日開催は困る、といった背景がある。これに対し、助言者は「学校が父母に背を向けるこ

がなかなか結べない。しかし、教師にとって教育実践を生かすためには、地域とのかかわりは欠かせない。地域に教育力をつけるためにはいろいろやる必要があるだろう。それこそ、日曜日に運動会を開くこと、PTAの会合に出席しやすいように工夫を重ねること、そんなあたりまえのことから考えていくことが大切だろう。

有徳の人間がつくれるとは限らないという意味だ。「人間性の回復」を学校でいくらか叫んでみても、歯がたたないような現実が確かにある。しかし、そこから出発するより仕方がない。

いま、校長、教頭試験のために「生徒指導資料集」(文部省編)がベストセラーが続いているという。しかし、本を通してなるほど模範答案は書けるかもしれないが、それでは子どもたちに直面できないのではないか。教師にいま求められているのは、子どもたちと生ま、生ました対話ができる力だろう。極くあたりまえの、人間力、みたいなものかもしれない。

とになってはいないだろうか」と指摘。

◆「PTAの開催時間を午後二時からとし、教職員が参加しやすい勤務時間に開いた。それでも父母の出席は100%近かった」(埼玉)

傍聴していた父母からこんな質問があった。「父母は(勤務があると)年休をとって参加する。この不平等をどう考えるか」

◆「主任制の問題にしても、私たち教師が父母のところへ降りていかなければ、父母にわかってもらえないのではないか」(東京)

「先生は「父母のところまで降りていく」などといういい方をしないでいただきたい。教師のそういう感覚には父母はついていけない」と岩手の父親が反論していた。

教師と父母の議論は、なかなかかみ合わない。教師側は、父母にこういう。

「うちの子」点ばりのエゴイズム」

「学校のことを口を出さないで、家庭でのしつけをきちんとすれば、それでいいではない。

ない。

かつて、日教組の組合員たちは「要求できるところから出発」をスローガンに掲げ、数々の権利を主張、労働条件を向上させてきた。そして教員の待遇が飛躍的によくなった。いま、要求目標は薄れ、若い教師を中心に組合離れが進んでいる。日教組の当面の闘う相手は自らの存在そのものになり、まさしく「教師のあり方」が問われてきている。いま、「教師としてのあたりまえのことをやる」ことから出発しなくてはならない。先が見えなければ、基本に戻るのだ。

さらに言えば、教師が、幼ない頃から成績で輪切りにされ、子どもたちに挫折感を抱かせる制度の片棒を担っていることこそ問い直し、「生き生きとした学校」への改革に向けて具体的な働きかけをする必要に迫られている。受験体制が「ちりと固定化している中で、「情熱」を失わず、また「管理主義」にも陥らず、教師たちが足元を見つめ、道を切り開いてほしい、と思う。

……毎日新聞教育取材部……